

立ち読み版



長野県立大学 理事長

あんどう くにたく

安藤 国威さん

1942年生まれ、愛知県出身。東京大学経済学部卒業。1969年ソニーに入社。ソニー・フルデンシャル生命保険代表取締役副社長、ソニー米国法人社長などを経て、1994年ソニー取締役役に就任し、パソコン「VAIO」やデジタルカメラ、携帯電話などデジタル機器の開発・事業化に取り組む。2000年に代表取締役社長兼COOに就任。2005年からはソニーフィナンシャルホールディングス及びソニー生命保険代表取締役会長を務める。その後、一般社団法人Japan Innovation Network (JIN)の理事に。2018年長野県立大学理事長に就任。

【写真】安岡 嘉

ソニーの多角化経営を創ったリーダーが 長野で人づくりに挑む

【取材・文】原 正紀

株式会社クオリティ・オブ・ライフ代表取締役・高知大学客員教授・成城大学非常勤講師。中小企業診断士。早稲田大学法学部卒業後、大手メーカー、株式会社リクルートでの勤務を経て、独立。産学公個に対し、採用・育成・人事制度構築など、人材関係の幅広い提案を行う。著書に「採用氷河期」(日本経済新聞出版社)、「優れた企業は日本流」(扶桑社)、「インタビューの教科書」(同友館)など多数。

HARA'S
BEFORE

日本経済を支え、電機業界で独自の価値を創出し続けてきたソニー。ハードの強みに加え、近年は金融やエンタメなどでの多角化に成功し、より一層、独自色を強めてきた。それらのベースとなる生命保険分野への進出やPC事業成功などで実績を上げた安藤さんは、今は長野県立大学理事長として人づくりに注力している。その活躍の足跡やビジョンを紐解いていきたい。



地方にこそロマンがある

原：長野県立大学の理事長に就任されたのは、どんなきっかけがあったのですか。

安藤：リーマンショックで日本の企業が一挙に競争力を失ってしまっ、「これではいかん」と考えていたところ、経産省からの要請で産学官から有識者を集めた「ニューフロンティア人材委員会」という研究会を作ったのです。3年ほど、その座長をやっていました。私は「大企業ももう一度復活しないと、日本は立ち上がらない」という強い使命感を持っていたものですから、座長を引き受けたわけです。日本の大企業からイノベーションが起こらなくなったのに対して、欧米はますます強くなってきた。デジタル分野で大きく遅れをとって、GAFAsの時代に移ってきました。ただ、いろいろ調べてみると、カリスマリーダーや、スティーブ・ジョブズのような天才的な人物が、イノベーションを生み出すわけではない。イノベーションとは仕組みでした。そのようなエコシステムをつくれば、恒常的にイノベーションが生まれる環境ができ

ることがわかってきたわけです。こうした委員会での研究成果を実行するために、一般社団法人「ジャパン・イノベーション・ネットワーク」(JIN)を立ち上げました。

ところが、JINでの活動を行っているうちに、企業の求めている人材と、大学など高等教育を受けた人材にミスマッチがあることに気づいたのです。シリコンバレーでは学生が先生と一緒にになってどんどん起業し、さらに先生も一緒にになって事業をするために飛び出して行き、また戻って教える。産学官連携などと言わなくても、こうしたことを進める環境ができています。中国の深圳などもそうですね。ところが日本には、そういう場所がなかった。学生時代から社会に打って出る人材を育てるべきだと思っていますときに、長野県知事からお声がかかったのです。社会に価値を生み出すソーシャルイノベーターやアントレプレナーを育成する大学を作りたいということでした。

原：私も産学官と連携して活動しているので、そういった仕組みの欠如はよく感じます。

安藤：長野県立大学では、1年生は寄宿舎(ドミトリー)生活で、2年になったら短期留学を経験しなければならいんです。小さな大学で、開学して2年目ですが、大きな構想力で時代の先を見据えながら人を育てることは、人生のテーマになり得ると思っています。地方創生と同時に人材教育を考えられる長野にこそ、フロンティアがあると感じています。若者よ、ロマンを求めて地方で頑張ろう、地方で起業しよう。「地方にこそロマンがあるのだ」と最近よく言っていますよ(笑)。